

かささぎ通信 第157号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2026年 3月 13日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2026年2月の「森三郎の作品を読む会」では、
「三色すみれ」(『日本児童文学』5、1947年11月)
「帽子に化けたクロネコ」(『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』1949年2月)を読みました。

今回は「三色すみれ」の中の一章「不幸な港町」を読みました。

森三郎は、小さな穏やかな港町を描く古い石版画と、押しも押されぬ貿易港として知られるようになった同じ港町を描く近代派の油絵を登場させ、この町に変化をもたらせた不思議な事件について語ります。事件は、三年に一度、この町のはるか沖合に小さな白い帆を張り連ねた古風な赤い船が浮かぶようになったことから始まります。この船が現れると町中の人が死んだように眠ってしまい、その間に勉強も氣立ても町で一番いい一人の子どもがさらわれてしまうのでした。その子どもの中には身代金のように金貨が三枚置かれており、悲しみにくれた親たちはそれをお墓に埋めるということが続いています。また三年目のある時、赤い人買い船が置いていった三枚の金貨を商売の資金に回すことを考えた父親がいました。貿易事業に成功した父親をまねて、以前にお墓に埋めた金貨を掘り起こし事業をする人たちも出て、いつしかこの港町は繁盛し、いまわしい赤い船はもう来なくなりました。

しかし作者は、町の変化とともに人々がせこましく、がさつになり、子どもまでお菓子よりお金を欲しがるようになったと言います。町の繁栄がいい意味でも悪い意味でも人々に変化をもたらすという思いは、森三郎「城下町」(1948)の最後の「今では年がら年中わさわさしてみて落ち着きを失った自分への反省」という表現と合致します。「読む会」で作品をできるだけ時系列で読んできたからこそ、戦後1946、47年という執筆当時の三郎の気持ちがよく分かるように思います。

「三色すみれ」は眠り姫、月の仕返し、赤い靴など物語が錯綜して宝石のよう、不思議な楽しいお話でした。「いままで読んできた作品とはガラッと違った話で、こんな作品もあるのだとびっくりしました。絵の世界の中に入り込んで、不思議な出来事が進んで行く、そしてすっかり変わった世の中の様子が、石版画から油絵に象徴されているのだと思いました」という感想が寄せられました。

次に読んだ『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』の表題作「帽子に化けたクロネコ」は『森三郎童話選集 かささぎ物語』(刈谷市教育委員会編、1995年)に所収の作品で、「読む会」でもすでに読んだことがあります。『かささぎ通信』67号で報告しました。

再度読んでみても、終戦直後のインフレ対策で「新円切り替え」がおこなわれたころの話なのに、現在とあまりに状況が似ておかしくなりました。おじいさんとおばあさんの息子から「悪い友達に誘われて競馬に行き、大損をしたから三千元送ってほしい」と、オレオレ詐欺のような懇願の手紙が届きます。おじいさんは工面のために汽車に乗って弟を訪ねますが、あわてたおじいさんが帽子の代わりに頭に掛けていったクロネコの機転で、おじいさんは三千元を手に入れます。そこで帰ればいいのに、折角だからと弟に会いに行ったところ、弟の口車に乗せられ三千元を渡してしまいます。家には息子から催促の電報が届いていました。あぶく銭はやっぱり身に付かないねと納得し合いました。しかしおじいさんが実質的に損得なかつたことについて「日本では真つ黒の猫は福猫と言われているのでお話のクロネコは福猫だったんですね」という猫好きの会員の説明もあり、題名がびつたりだと、にぎやかに会が終わりました。

〈次回予定〉2026年4月10日(金)午後一時半〜三時半

「三色すみれ」続き(『日本児童文学』5、1947年11月)

「あねさま人形」(『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』1949年2月)